

真実を知ってください

覚せい剤

クリン
アイス
グラス

メス
ツイーク
ティナ
スピード

drugfreeworld.org

この小冊子が 制作された理由

街中や学校、あるいはインターネットやテレビの中で、薬物についてのさまざまな情報が氾濫しています。その中には正しい情報もありますが、そうでないものもあります。

そうした薬物情報の多くは、売人によって広められたものです。今では更生したかつての売人は「薬物を買ってもらうためなら、どんな嘘でも言っていた」と証言しています。

そのような情報にだまされないでください。薬物乱用という罠を避けるためには、事実を知る必要があります。この小冊子はそのために制作されたものです。

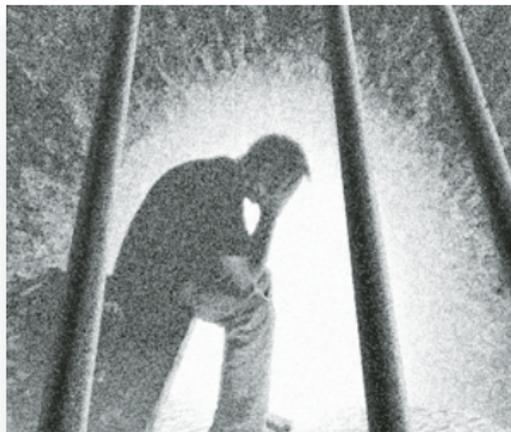
この小冊子をお読みになった上で、皆様のご意見やご感想をウェブサイト **drugfreeworld.org** から、またはEメール **info@drugfreeworld.org** までお寄せください。

結晶状覚せい剤とは？

結晶状覚せい剤とは、アメリカ合衆国ではクリスタル・メタンフェタミンと呼ばれており、結晶体の覚せい剤のことをいいます。

覚せい剤はもともと白い結晶状の薬物で、使用者はこれを微粉末にして鼻から吸引したり、喫煙したり、注射器で注入したりします。現在は錠剤型覚せい剤を経口摂取（口から服用）する人さえいます。しかしどんな方法で取ったとしても、この薬物を取ると、続けて取りたいという強い欲求が引き起こされます。なぜなら覚せい剤は、見せかけの幸福感や充実感、根拠のない強い自信、極端な活発さ、エネルギーをつくり出すからです。また、食欲もなくなります。このタイプの薬物の作用は通常6時間から8時間続きますが、24時間続くこともあります。

最初は何らかの快感を得られるかもしれませんが、いったん取り始めると、覚せい剤はその人の人生を破壊し始めます。



覚せい剤とは？

覚せい剤は、コカインなどの強力なストリート・ドラッグと同じクラスに位置付けられる違法薬物です。日本で乱用されている覚せい剤はほとんどがメタンフェタミンです。この薬物には多くの呼び名があります。日本ではシャブ、スピード、エス、また海外ではメス、

クランク、チョークと呼ばれています。
(7ページにこの薬物の通称名の一覧があります。)

結晶状覚せい剤はあらゆる年代の人に使用されており、「クラブ・ドラッグ」としてナイトクラブやレイブ・パーティーの際に用いられるときもあります。結晶状覚せい剤の最もよく知られた通称は、がんころ、ロックです。

覚せい剤は危険かつ強力な化学物質です。それはあらゆる薬物と同様に毒です。最初は名前の通り覚醒作用があり、それから身体を組織的に破壊し始めます。



そのため、覚せい剤は記憶力の低下や攻撃性、精神異常的な行動、そして心臓障害や脳障害に発展しかねないような深刻な症状を引き起こします。

覚せい剤は非常に中毒性が高く、身体に蓄えられたエネルギーを消耗させ、薬物をさらにとることによってしか軽減できない、破壊的な依存症を引き起こします。

結晶状覚せい剤は非常に効き目が強く、多くの使用者が、この薬物を初めて使用した時から「はまって」しまったと報告しています。ある結晶状覚せい剤の中毒者は次のように言っています。「1回試したらあつという間にはまって、もう抜けられなくなった。」彼は家族、友人、ミュージシャンの仕事の失い、最後にはホームレスとなりました。

このように覚せい剤は、最も治療が困難な薬物であり、とりになつた多くの人が命を落としています。



覚せい剤の使用者 (2002年)

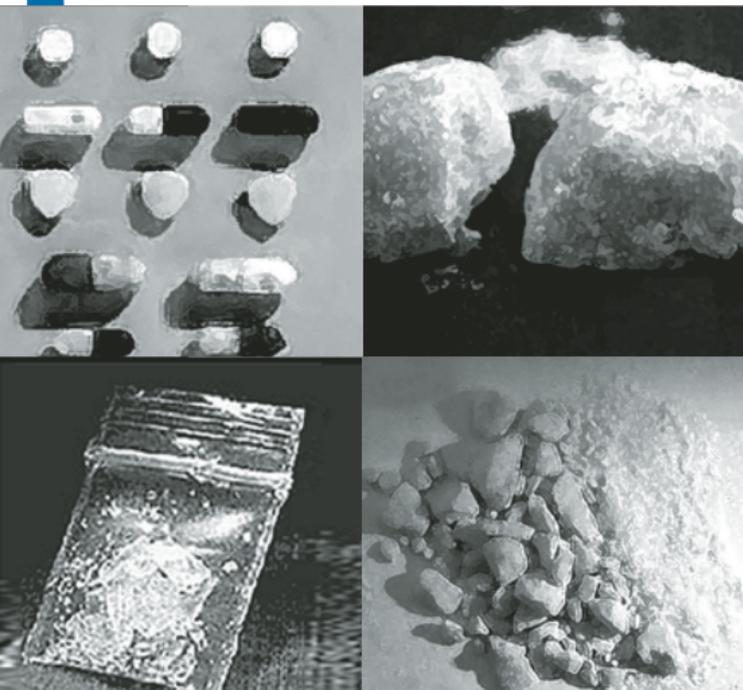


2年半後

覚せい剤をやるようになったのは高校3年の時だった。大学に入って最初の学期に、覚せい剤の問題が大きくなりすぎて、退学するしかない状況になった。何時間も鏡に映った自分を見ながら、ずっと顔の皮膚をつまみ続けていたせいで、はしかみたいに顔全体に赤い斑点ができた。覚せい剤をやってるか、覚せい剤を手に入れるか、やることといえばそのどちらかしかなかった。」

— アン・マリー

覚せい剤の種類は？



覚せい剤は通常、白い結晶状の粉末です。無臭で苦い味がし、水またはアルコールに簡単に溶けます。他に見られる色には、うす茶色、灰色がかった黄色があり、また錠剤型覚せい剤には、オレンジ、さらにピンクなどさまざまな色や形状のものがあります。先にも触れたように、それは吸引や喫煙、あるいは注射によって摂取されます。結晶状覚せい剤は、氷に似た透明な結晶の塊として売られており、日本ではロックやがんころと呼ばれています。もっとも一般的な取り方はあぶって煙を吸う方法です。



覚せい剤 (メタンフェタミン) の通称

覚せい剤と結晶状覚せい剤を指す呼び名は下記の通りたくさんあります。

覚せい剤 (メタンフェタミン)

- スピード
- S (エス)
- 冷たいの
- 速いの
- クランク
- チキンフィード
- シナモン
- クリンク
- クリプト
- ファースト
- メス
- メスリーズ・クイック
- メキシカン・クラック

- パービティン
(チェコ共和国)
- レッドネック・コカイン
- ゲッゴ
- ティクティク
- ツイーク
- ウォッシュ
- ヤーバー (東南アジア)
- シャブ

結晶状覚せい剤

- ロック
- バツ
- ブレード
- クリスティー
- クリスタル
- クリスタルグラス
- グラス
- ホット・アイス
- アイス
- がんころ
- クウォーツ
- シャーズ
- ストーブ・トップ
- ティナ
- ベンタナ

覚せい剤の成分は？

日 本で乱用されている覚せい剤のほとんどがメタンフェタミンです。メタンフェタミンは、コカインのように植物から作られたものとは異なり、合成された「人工」の化学物質です。

メタンフェタミンは通常、密造工場でさまざまなタイプのアンフェタミンやそれに類する化合物を用いて製造されますが、効果を増すために他の化学物質が混ぜられています。この薬物の製造には、多くの場合ごくありふれた風邪薬の錠剤が基礎原料として使用されます。メタンフェタミンの「料理人（製造者）」は、その種の錠剤から活性成分を抽出し、さらに薬物の強度を高めるためにバッテリー液、浄水管の洗浄剤、ランタンの燃料

や不凍剤といった成分を混ぜ合わせます。

こういった化学物質には、爆発を起こす危険性があります。またメタンフェタミンを製造する人たち自身が薬物の常用者であり、周囲の状況に不注意であることから、原材料を調合する際にしばしば爆発を起こし、ひどい火傷を負ったり、死亡したりすることもあります。こういった事故は近隣の人たちにとっても非常に危険です。

また、こうした密造所からは有害な廃棄物が大量に発生します。メタンフェタミン1kgを製造すると5kgの廃棄物が出ます。この廃棄物にさらされると、身体が汚染され、病気になることもあります。

「生活保護の給付金は、覚せい剤を買うにも息子を育てるにも十分ではありませんでした。それで借りていた家でメスをつくることにしたのです。有毒な化学物質も冷蔵庫に保存しました。そういった毒物が他の食べ物に染み込んでいくのも知らずに…

3歳の息子にチーズを食べさせていた時、自分が毒入りの食べ物を息子に与えていることには気付いていませんでした。覚せい剤でもうろうとしていて、息子が死にかけていることに気付いたのは12時間も後のことでした。けれども私はひどい酩酊状態だったので、5マイル離れた病院にどうやって息子を連れて行くかを考えるのにさらに2時間かかりました。緊急治療室に到着するまでに、私の坊やは死を告げられました。死因は致死量の水酸化アンモニウムの摂取…覚せい剤を作るのに使用した化学物質のひとつでした。」— メラニー

結晶状覚せい剤の
密造所



世界中にはびこる 覚せい剤中毒

国 連薬物・犯罪事務局によれば、全世界でメタンフェタミンを含むアンフェタミン型の中枢神経刺激剤の生産量は年間500トン近くに上り、こうした薬物の乱用者は2470万人いると推計されています。

警察庁の調べによると、日本における2007年の覚せい剤の押収量は340.1kgで、検挙者数は16,929人となっています。

また薬物別の検挙者数を見ると、2005年の薬物総検挙者数15,803人のうち、覚せい剤絡みの検挙者数は13,346人と圧倒的な割合を占めており（約8割）、中でも来日外国人による覚せい剤事犯の増加が目立っています。

2006年の調査によると、日本国内で薬物中毒の治療のために入院した人の49%が覚せい剤常用者でした。

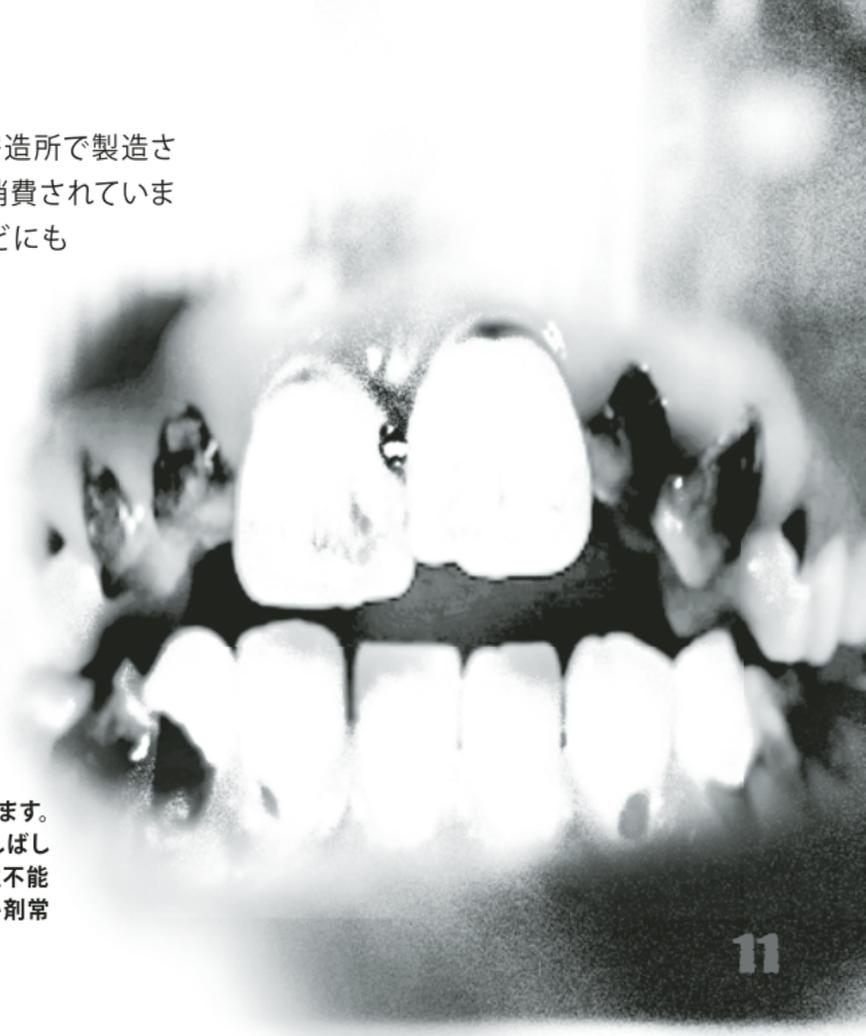
アメリカ合衆国で薬物中毒の治療のために入院した人のうち、覚せい剤を始めとする中枢神経刺激剤を乱用していた人々が占める割合は、1996年の3%から、2006年には9%と3倍になりました。州によってはこの数値はさらに高くなっており、たとえばハワイでは、2007年に薬物中毒やアルコール依存症の治療を求めた人々のうち、48.2%が覚せい剤の使用者でした。

覚せい剤はチェコ共和国でも広範囲に乱用されています。ここでは覚せい剤はパービティンと呼ばれており、

小規模な密造所や、それよりも規模の大きい密造所で製造されています。パービティンは主にチェコ国内で消費されていますが、ヨーロッパのその他の地域やカナダなどにも輸出されています。チェコ共和国、スウェーデン、フィンランド、スロバキア、ラトビアでは、薬物中毒の治療を求める人々のうち、アンフェタミンやメタンフェタミンの常用者が20%から60%を占めると報告されています。

東南アジアで最も一般的に使用されている覚せい剤の形状は小さな錠剤で、タイではヤーバー、フィリピンではシャブと呼ばれています。

覚せい剤に含まれる有毒な化学物質は、ひどい虫歯を招きます。歯が黒く汚れて腐り出し、抜くしかない状態になることがしばしばです。歯と歯茎が内部から破壊され、歯根が腐って再生不能な状態になります。この写真のような状態の歯は、覚せい剤常用者によく見られるものです。



覚せい剤の致命的な影響

覚せい剤使用者が短期的および長期的に受ける影響

覚せい剤や結晶状覚せい剤を摂取すると、擬似的な充実感や活力が生じるため、使用者は自分の身体にその限界を超えた過剰な動きを強いる傾向があります。そのため、薬物の効き目がなくなると、ひどい脱力感を体験し、身体的、精神的に衰弱することもあります。

この薬物を引き続き使用すると自然に生じる空腹感が感じられなくなるため、体重が極端に減少する場合があります。この薬物の使用による悪影響には、睡眠パターンが崩れる、多動（ハイパーアクティブ）、吐き気、誇大妄想、神経過敏などがあります。



1979



1989



1991



2001



1998



2004

乱用者の顔に残る傷跡と早期の老化現象は、覚せい剤のおぞましい影響を表しています。

他の深刻な影響として、不眠、混乱、幻覚、不安、被害妄想*、そして攻撃性が増すなどがあります。時にはひきつけを起こし、死に至る場合もあります。

長期的な害

覚せい剤を長期的に使用すると、回復不能な損傷がもたらされます。心拍数や血圧が高くなり、脳の血管が傷つくために脳卒中、あるいは不整脈を起こし、心臓血管系の破壊から死に至る場合もあります。また肝臓や腎臓、肺などの損傷を引き起こすことがあります。

覚せい剤乱用者は脳にダメージを受け、記憶力の低下や抽象的な考えを把握できないなどの傾向が高まり、実際に兆候として現れます。回復した場合でも、記憶に空白ができたり、極端に躁うつになったりするのが通例です。

* 被害妄想：他人に対して根拠のない疑い、不信任、恐れを抱く状態のこと。

† アルツハイマー病：老人がかかる記憶喪失を伴う病気。

覚せい剤の害

短期的な影響

- 食欲不振
- 心拍数や血圧、体温の上昇
- 瞳孔拡大
- 睡眠パターンが崩れる
- 吐き気
- 奇妙で異常な、時に暴力的な言動
- 幻覚、神経過敏、多動（ハイパーアクティブ）
- パニック、精神異常
- 過剰摂取による痙攣^{けいれん}、脳卒中、突然死

長期的な影響

- 心臓発作、脳卒中、死へとつながる心臓や脳血管の永久的な損傷や高血圧
- 肝臓や腎臓、肺などの損傷

- 鼻から吸引した場合、鼻の中の細胞破壊による鼻血
- 喫煙した場合、呼吸器の障害
- 注射した場合、感染症やはれ物
- 栄養失調、体重の減少
- 重度の虫歯
- 周囲を正しく認識できなくなる、無気力、混乱から来る極度の疲労
- 強い心理的依存
- 精神異常
- 抑うつ
- アルツハイマー病[†]に類似した脳の損傷、脳卒中、てんかん

覚せい剤はどのように人々の 人生を変えてしまう？

覚せい剤を取る人たちは、程度の差こそあっても、この薬物に人生を支配されるようになります。覚せい剤の乱用は次の3つのカテゴリーに分けられます。

軽度の覚せい剤乱用者：軽度の乱用者は、覚せい剤を飲み込むか、または鼻から吸引します。こうした人たちは、仕事を終わらせるまで目を覚ましていられるように、覚せい剤の強い覚醒作用に頼るのです。また体重を減らすために食欲を抑える作用をほしがる人たちもいます。このような人たちは常習者の一歩手前にいます。

覚せい剤の常習者：常習者になると、喫煙か注射で覚せい剤を取るようになります。こうすると薬物をより効き目の強い形で摂取することになるので、さらに強い「快感」(ラッシュ)を得ることができ、それが心理的な

依存につながるのです。このような常習者は、より重度の乱用へと移行していきます。

重度の覚せい剤乱用者：重度の覚せい剤乱用者は完全な中毒者で、しばしば「スピード・フリーク」と呼ばれます。こうした人たちの生活は、薬物で「ハイ」になった後に襲ってくる強烈な落ち込みを防ぐことだけに向けられています。そのため、乱用者は薬物から「快感」(ラッシュ)を得るために、さらに多くの量を摂取しなければならなくなっていくます。しかし、他の薬物と同様、覚せい剤から得られる快感は1回ごとに弱くなっていくため、覚せい剤の中毒者は、救いようのない命取りの悪循環へと陥っていくのです。



覚せい剤の使用により 経験する 7つの段階

1 ラッシューラッシュは、覚せい剤を注射した時に、乱用者が最初に感じる反応（快感）です。快感を感じている間、乱用者は心拍数が急激に上昇し、代謝*が活発になり、血圧や脈拍が上昇します。約2～5分間しか持続しないクラック・コカインによる快感とは異なり、覚せい剤がもたらすラッシュは30分間も持続することがあります。

2 ハイー快感の後に続くのが「ハイ」の状態です。ハイになっている間、乱用者はしばしば自分が攻撃的で鋭敏になったように感じ、論争を仕掛けたり、他人の話に割り込み、その人たちの話に勝手に結論を出したりします。また薬物の作用で妄想しがちになり、何時間も同じ窓の掃除を繰り返すなど、取るに足らないことに過度に集中するようになります。ハイの状態は4時間から16時間持続することがあります。

* 代謝：体内で食物がエネルギーに変換される過程。

3 めいてい**酩酊状態**— 酩酊状態とは、薬物やアルコールの使用をコントロールできなくなった状態のことで、乱用者がハイの状態を保つために、さらに覚せい剤を喫煙、注射しようとする衝動を抑えられなくなることがあります。酩酊状態は3日から15日間も続くことがあります。酩酊状態の間、乱用者は精神、身体の両面で多動（ハイパーアクティブ）になります。乱用者がさらにこの薬物を喫煙し、注射するたびに、その人が感じる快感は弱まっていき、最終的には快感もハイの状態も感じられなくなってしまいます。

4 **禁断症状**— 「禁断症状」と呼ばれる段階に達した覚せい剤の乱用者は最も危険な状態にあります。これは、酩酊状態が終わり、もう覚せい剤から快感やハイの状態が得られなくなってしまった時に起こる現象です。乱用者は猛烈な空虚感と薬物への渴望を軽減することができず、自己の感覚を失ってしまいます。この状態に共通しているのは強烈なかゆみで、使用

者は皮膚の下を虫が這いまわっていると思込むことがあります。何日も眠ることができず、しばしば完全に精神に異常をきたした状態になり、自分だけの世界に入り込み、誰にも知覚することができないものを見たり聞いたりするようになります。その幻覚は非常に鮮明で、本物であるように見えるため、使用者は現実世界から遮断され、自分自身および他人に対して危険な存在になりえます。また自傷の危険性も高くなります。

5 **破綻**— 酩酊状態の乱用者は、体が薬物の作用にそれ以上対処できず機能を停止すると、「破綻」と呼ばれる状態になります。破綻の状態になった人は長時間眠り続けます。最も凶暴な乱用者でさえ、破綻の状態にある間は生気がなくなります。破綻の状態は1日から3日間続きます。

6 **覚せい剤の「脱力感」**— 破綻の後、乱用者は衰弱や飢え、脱水、また身体的、精神的、感情的

に完全に消耗した状態に戻ります。通常この状態は2日から14日間ほど続きます。このような状態はさらに覚せい剤を摂取すれば「解決」されるため、使用者は中毒者になることを余儀なくされます。

7 離脱反応—最後に薬物を使用して大体30日から90日後、乱用者は離脱反応を経験します。まず、その人は憂うつになり、快楽を経験するエネルギーや能力がなくなります。次に覚せい剤への渴望がますます起こり、乱用者はしばしば自殺を試みるようになります。覚せい剤の離脱は極度の苦痛を伴うものであるため、ほとんどの乱用者がまた薬物に戻ってしまいます。そのため、従来の治療では患者の93パーセントが覚せい剤の乱用に戻っています。



覚せい剤の歴史

覚せい剤は新しい薬物ではありませんが、製造技術の進歩によって、近年さらに強力になってきています。

アンフェタミンは1887年にドイツで初めて製造され、さらに強力で製造が容易なメタンフェタミンは、1919年に日本で開発されました。その結晶状の粉末は水溶性で、注射での使用に最適でした。

メタンフェタミンは、第二次世界大戦中に広範囲に用いられるようになり、連合国側、同盟国側において自軍の兵士たちを常に覚醒させておく目的で使用されました。日本では、神風特攻隊の隊員が自爆作戦の前にヒロポンと名づけられたメタンフェタミンを大量に与えられました。戦後になって軍用の供給品が一般の市民

に出回り、注射によるメタンフェタミンの乱用は伝染病のような勢いで広まりました。

1950年代にはメタンフェタミンは簡単に入手できるようになったため、大学生やタクシー、トラックの運転手など、夜更かしをする人々に興奮剤として使用され、覚せい剤乱用は一気に広まりました。「注射1本、錠剤1錠」ですぐに元気になり勇気が湧くとうたわれたこの薬物は、戦後の敗戦による精神的混乱の最中にあった日本においてますます広がりを見せ、1954年のピーク時には、検挙者数は約5万6千人にも達しました。(第1次覚せい剤乱用期)

その後覚せい剤乱用は日本で大きな社会問題となり、1954年と1955年に取り締まりの強化を目的に、

覚せい剤取締法の改正が行われました。この対策により覚せい剤の乱用は沈静化し、1955年頃には日本国内での密造は一掃されました。

1970年代には覚せい剤乱用者の検挙者数は再び増え始め、1984年の検挙者数2万4千人をピークに、年間の検挙者数が2万人台の時期が1996年まで続きました。(第2次覚せい剤乱用期)

1998年から現在に至っては、第3次覚せい剤乱用期と宣言されています。この背景として、海外からの大量の覚せい剤の流入、従来の暴力団絡みの密売組織に加え、来日外国人の密売組織が街頭で無差別的に密売することにより、覚せい剤が安価で手軽に入手できるようになったことが考えられています。またインターネットの普及により、ネット上での密売も横行し、若者がファッション感覚的に薬物を取る風潮も、覚せい剤乱用の広がりに拍車をかけています。

神風特攻隊員は、自爆という特別任務を果たす前に、お茶の粉末にメタンフェタミンを混入して固めたものを与えられました。



薬物についての真実

薬物は基本的に毒です。その作用は、摂取する量によって決まります。

少し摂取すると、活動をより活発にする中枢神経刺激剤として作用します。多めに摂取すると、活動を抑制する鎮静剤として作用します。さらに多量に摂取すると毒となり命を奪います。

これはどの薬物にも当てはまります。こうした作用を引き起こすのに必要な量に違いがあるだけです。

それだけではなく、多くの薬物には人の心にも影響を及ぼす弊害があります。薬物を取っている人が自分の周囲で起こっていることを知覚しても、それは歪んだものになってしまう可能性があります。その結果、その人の行

動は奇妙だったり、不合理であったりするかもしれません。暴力的になることもあるでしょう。

薬物はすべての感覚を遮断します。望ましい感覚も望ましくない感覚もです。そのため、短期的には痛みを和らげるために役に立ちますが、同時に人の能力や機敏さを消し去り、思考を不明瞭にします。

医薬品は、身体の働きを良くしようとして、何かを速めたり、遅くしたり、身体の働きを変えることを意図した薬物です。時には必要ですが、薬物であることに変わりはありません。中枢神経刺激剤や鎮静剤といった薬物を取り過ぎれば命を落とすこともあります。したがって、医薬品は規定通りに使用されない場合、違法薬物と同様に危険なものになり得ます。

**本当の解決策は、
事実を認識し、最初から
薬物など使用しないことです。**



なぜ人は薬物を取るのでしょうか？

人が薬物を取る理由は、自分の人生を変えたいと思うからです。

若い世代の人たちが薬物を取る理由には、以下のものがあります。

- 周りとうまくやっていきたい。
- 問題から逃避するため。
- リラックスするため。
- 退屈を紛らわすため。
- 大人になったような気がするから。
- 反抗するため。
- どんなものか試してみたい。

こういった若者は、薬物が問題を解決してくれると思っているのです。しかし、結局のところ薬物は問題にしかありません。

自分の問題に直面することが困難なこともあるでしょう。しかし、薬物によって解決しようとしている問題よりも、薬物を使用した方が常に悪い結果を招きます。本当の解決策は、事実を認識し、最初から薬物など使用しないことです。



参考文献

欧州薬物・薬物中毒監視センター
年次報告書2008年版

インターポール
メタンフェタミンに関する報告書
2005年9月27日

“Methamphetamine Facts & Figures,” Office of National Drug Control Policy, 2008

Narconon International
information on
methamphetamine,
www.narconon.org

ニューズウィーク誌
「メタンフェタミンの流行：
アメリカの新たな薬物危機の
内幕」2005年8月8日

主任研究者：和田清
「薬物乱用・依存等の実態把握と
乱用・依存者に対する対応策に関す
る総合研究報告書」2007年3月

“County knocks meth use,”
9 July 2008,
SignonSanDiego.com

警察庁組織犯罪対策部
薬物銃器対策課
「平成20年中の薬物・銃器情勢」
2009年4月24日

国連薬物犯罪事務所 (UNODC)
メタンフェタミンに関する報告書
1998年

Youth Risk Behavior
Surveillance System 2007
study, Centers for Disease
Control and Prevention

合衆国麻薬取締局
メタンフェタミンに関する報告書
2005年10月

合衆国国立薬物乱用研究所
メタンフェタミンに関する報告書
2005年5月

国連薬物・犯罪事務所
2008年 世界薬物報告書

“National Methamphetamine
Threat Assessment 2008,”
National Drug Intelligence
Center, U.S. Department of
Justice

写真：
2ページ：Corbis；
3ページ：istock.com/Lou Oats；
5ページ：Faces of Meth；
6ページ：DEA/右下：覚せい剤；
12ページ：イリノイ州タズウェル・
カウンティ司法長官事務所の
提供/右：覚せい剤使用者
(1998年-2004年)

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズは、これまでに22の言語で出版され、世界中で何百万部も配布されてきました。新しいドラッグが次々と世の中に出回っており、その影響に関する新たな情報が知られるようになっています。本シリーズはそうした新しい情報を盛り込んだ最新版です。

これらの小冊子シリーズは、アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスを拠点とする非営利の公益法人「薬物のない世界のための財団」によって出版されています。

財団は、その国際防止ネットワークを通して各種教育資料や助言を提供したり、調整を行ったりしています。また、青少年や保護者、教育者やボランティア団体、政府機関ばかりではなく、薬物乱用のない人生を送ることに関心のある人なら誰とでも協力しています。

真実を知ってください：薬物

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズには、マリファナ、アルコール乱用、エクスタシー、コカイン、クラック・コカイン、覚せい剤、有機溶剤・吸入ガス、ヘロイン、LSD、処方薬乱用についての正確な情報がまとめられており、読者が自分の意志で薬物のない人生を送ることができるように役立つ内容になっています。

さらに情報を知りたい方、またはこの小冊子シリーズのいずれかをさらに何部かご希望の方は、下記までご連絡ください。



Foundation for a Drug-Free World
1626 N. Wilcox Avenue, #1297
Los Angeles, CA 90028 USA
drugfreeworld.org
info@drugfreeworld.org
1-818-952-5260

薬物のない世界のための財団
日本支部
〒170-0001 東京都豊島区
西巣鴨1-17-5
パークホームズ西巣鴨308
TEL : 03-5394-0284
Eメール : info@drugfreeworld.jp
drugfreeworld.jp